

---

# WHITE狂想曲

～like you...～

青野綾華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WHITE狂想曲

↓like you↓

### 【NNコード】

N7948S

### 【作者名】

青野綾華

### 【あらすじ】

WHITE  
カブリオチ  
WHITE狂想曲～like you～

（あなたのように…）～

小五郎が受けた依頼で、北海道まで行くことになったコナン達。依頼は人捜しのこと。

ちょうどその頃北海道では、沢山のイベントがやっていて、人捜しの休憩がてら参加することになる。だが、そこで悲劇が…

歩美「だつて…だつて私、なりたかつたんだもん！」

蘭「もう、遅いから……だから早く貴方は……」

哀「もしかしたら私もなりたかったのかもしれない……」

私の2番目の作品です。

連載中の小説がクライマックスを迎えるとしているため、休憩として書きました（笑）でも、両作品両立させて書いていきたいと思います！ まだ駄文だけですが、お付き合い願います。 m（

――） m

ちなみに今回の話は歩美と哀（と蘭）がメインです。強いて言つなら哀です。

哀と明美の小さい頃の話なども入れる予定です！勿論コナンも活躍します。

最後にいじ拌見の方よろしくお願いします m（――） m

## Prologue (前書き)

まずは北海道にいくことになったきっかけについてです。

PS

後書きも是非読んで下せー！

“2月4日金曜日、昼”

今日は帝丹小学校、帝丹高校どちらも休みだ。帝丹高校の入試で5連休になつたのだ。

（阿笠邸）

歩美「はあ……今年の冬は何もないね……」

元太「俺どこにもいってねーんだぜ……」

光彦「僕もです……」

歩・元・光「ハア……」

ため息をつく少年探偵団。その顔は博士に「どこかに連れて行ってく」と訴えているようだった。

4

博士「仕方ない。どこかに連れて行ってやるつかの」

歩美「え、本当!？」

そう言えばあつちゃん、明日北海道に行くって言つてたな。何か人探しの依頼がきたらしくて……」

光彦「いいですね～。あー僕達も一緒にについて行きませんか?」

元・歩「賛成!」

コナン「おいおい……」

哀「クスッ」

コナンの後ろで話を聞いていた哀は小さく笑つた。

コナン「あんだよ……」

哀「さすが工藤君ね……毛利探偵の名を北海道まで轟かすなんて……」

哀は小さな声で言った。

「ナン」「ああ…結構男前だな?」

哀「悪魔ね…ある意味…」

「ナンはじと田で哀を睨む。

れ…」

元太「熊がどうかしたのか?」

突然元太がコナンと哀の会話に首を突っ込んできた。

「ナン」「え?あ、いや…熊見

れたらいいなーって…アハハ」

哀「北海道だつたら私も行くわ…」

あんのか?」

尋ねる。

いのよ…ねえ?悪魔さん?なーんてね…クスッ」

コナン「あつそつ。」

「ナンは呆れて哀から田線をずりした。

光彦「でも、どうやって毛利探偵頼めば…」

コナン「しゃーねーな。俺がおつちやんに頼んでやるよー!」

歩美「ありがとうー!」

(ほんと、コナンだーい好きー)

博士「じゃあみんなちやんと用意してござじやよ」

歩・光・元「はーーい!」

哀「フツ…」

「つしてみんなで北海道に行くことになった。



つまんなかったと思いますがご拝見ありがとうございますーこれからも頑張ります！

ところで、何故北海道にしたかと言つて、「沈黙の15分」の影響です。

すっかり雪にはまつてしまつて…（笑）

「沈黙の15分」にはまつてゐるなら新潟県にしろよーっと自分でも突つ込みたくなるのですが、アニメでキャラクター「デザイൻ」をやつていて、映画ではキャラデザ&総作画監督をやつて下さっている須藤昌朋さん（知らないですよね…）の生まれ故郷が北海道だから北海道にしました！

須藤昌朋さん大好きですー！（ちょっと気持ち悪いですね…ごめんなさいー！）

ちなみに題名の「WHITE狂想曲」は沈黙の15分のBGM「ホワイトクラシス」と沈黙の15分のマジックファイ尔「新潟→東京 おみやげ狂想曲」から取りました。like youは…そういう話だからです（笑）

ごめんなさい…長々と失礼しましたm(ーー)m

## Let's go to HOKKAIDO (前書き)

Let's go to HOKKAIDO

(こや、北海道へ)

まだ北海道ではつきました。

“2月5日土曜日、朝”

（空港）

朝の太陽が街を明るく照らす。

その頃、小五郎と蘭と園子は空港で少年探偵団達を待っていた。

蘭「うーん。気持ちいいー！」

園子「ホント！ 朝の空気は最高ねー！」

小五郎「つたく…なーんで鈴木財閥のじやじや馬娘がついてくるんだよ…」

園子「いいーじゃない！ 私だって北海道行きたいもの！ 蘭が誘つてくれたし！」

蘭「まあまあ、せつかく北海道までいくんだから、旅情気分で楽しもーお父さん。」

小五郎「バカやう！ 僕は依頼のためにいくんだぞ！ 旅情気分なんて関係ねーよ！」

コナン「ハハ…」

歩美「蘭お姉ちゃんー！」

遠くの方から歩美の声が聞こえた。ビリヤ  
ら空港についたみたいだ。

少年探偵団は一コ二コしながらひりひり走つてくる。

光彦「ハアハア…」めんなさい。遅くなつてしまつて…

蘭「いいのよ。」

小五郎「いいか！オメーら。大人しくするんだぞ！」  
歩・元・光「はい！」

哀「こんだけの人数になると本当に旅行みたいね…」

哀は小さな声でコナンに話しかけた。が、コナンはシンとして何も答えない。

哀「昨日のことまだ引きずっと根に

持つタイプね。」

コナン「バー口ー、んなんじゃねーよ…」

博士「もう時間じゃないのかの？」蘭「そうね。もつそろそろ飛行機に乗ろっか。」そしてコナン達は飛行機に乗った。

（飛行機）

博士とコナン、その後ろに歩美と哀、その後ろに元太と光彦が座り、反対側に小五郎、蘭、園子が座った。

スチュワード「まもなく出発します。」

歩美「ワクワクするね！」

元太「ああ！」

北海道に胸を膨らます少年探偵団。最初はワイワイと騒いでいたが、時間が経つにつれ、静かになつていつた。

光彦「まだ着かないんですかね。」

歩美「暇だよね」

博士「フツフツフツ…」

コナン「嫌な予感がする…」

博士「お待ちかねのクイズの時間じゃ…」

一同「……」

周囲は一層静かになつた。

元太「また、ダジャレクイズかよ…」

博士「北海道の釧路から10億円が盗まれたんじゃ。でも犯人は怖くなつて取つたものをどこかに捨ててしまった。さあ、そこはどこかの？」

歩・光・元「うん…」

コナン「…あ…分かつたぜ！」

園子「私も！」

蘭「私も…でも、ちょっと変わつた問題ね…」

歩美「うん…うん…あ…分かつた～！『10億円が盗まれた』って、『お金が取られた』ってことでしょ？釧路から金を取るのよ～だから答えは川路！！」

博士「せ、正確じや…」

元太「すげーぜ！歩美

蘭「ホント！」

歩美「えへへ…」

コナン「やるじゃねーか！」歩美（口、コナン君…）

歩美「そ、そんな……」

歩美は顔を赤くして照れる。

歩美（「ナン君みたいに冷静に考えてみたら解けたんだ…」）

哀「……」

みんなが博士のクイズに夢中になつていて、哀は一人物思いにふけていた。

歩美「どうしたの？」

心配して歩美は尋ねる。

哀「え？ あ……いや……何にもないわ……」

「ナン」「……」

そしてまもなく北海道に着いた。

## Let's go to HOKKAIDO (後書き)

ダジャレクイズですがちょっと変な問題ですよね… (^\_^; )  
お母さんによると三路とはあまり使わないとやつです。

またまたつまんなくなつていまゐなさこ三(ーー)m

次回は北海道の話です。

## DAIYAMOND Odust (前書き)

DAIYAMOND Odust  
ダイヤモンドダスト

\* 読み方注意

『弟子屈』は『てしかが』と読みます。

歩美「わ～！北海道に着いた！」

コナン達は飛行機から降りた。

哀「うわ！」

哀…らしくないが、哀は石につまづいてしまった。

コナン「おつと…大丈夫か？灰原」

「ナンはギリギリのところで哀を支えた。  
おかげでけが一つしなかった。

哀（く、工藤君…） 哀「…あ、ありがとう。」

（～～～～～～～～～～～～～～）  
北海道についたコナン達。依頼者が  
いるのは弟子屈町の青藤ホテル。コナン達は電車やバスを使い、景  
色を見ながら弟子屈町の青藤ホテルに向かった。

（～～～～～～～～～～～～～～）  
“午後1時”  
弟子屈町青藤ホテル前の雪原

一同「うわ～！綺麗！」

それはまるで宝石の様。太陽の光が細氷に反射してキラキラ光る…  
そう……それは…

雪原を舞つ

### ダイヤモンドダスト

光彦「まさに空から  
り降る宝石ですねー」  
歩美「なんか掴めそうー」  
蘭「懐かしいなー…」

蘭が静かに言つた。

口・園「へ? 何が?」  
蘭「ううん、何でも無いの」

蘭は降り続ける宝石をとろけるような瞳<sup>め</sup>で見つめる。

哀「…………」  
けど、哀はそれを

悲しい瞳で見つめていた。

私、見た……」の景色……まだ私が少し小さかつた頃……お姉ちゃんと一緒に……  
さんの薬の研究のために家族全員で北海道に行つた時……  
あの頃は一人とも普通の子供だった……組織

なんか気にもとめていなかつた…

雪原の上に明美の姿が映つた。哀には見え  
た…

優しくて明るくて、勇敢で、  
そして憧れの明美  
の姿が…

「……哀

哀ことつて、今瞳に映つているのはアルバ  
ムの一部だつた…  
まだ組織なんて気にもとめてなかつた頃の大事なアルバムの…  
だがそれが逆に哀を苦しめた。

明美「志保…」

雪原の上で舞い踊る明美が、哀の瞳の中で振り向いた。でも次の瞬  
間…

「パアアアン！」

頭の中で一発の銃  
声がなつたと同時に、明美は緋色の渦に巻き込まれて…消えていつ  
てしまつた…

（哀（お姉ちゃん…）

哀の瞳は小さく揺れる。

哀はアルバムを閉じるため、気持ちを落ち着けて瞳を閉じた。  
そして再び瞳を開いた。

哀（ふう……閉じられた…）

哀はため息を着いた。

博士「どうかしたのか？哀くん。」

哀「いえ……何にもないわ……」

哀は何もなかつたように答えた。

元太「なあ、早く

ホテル行こうぜ…」

蘭「そうね。もうそろそろホテルに行こうか。」

一同「はい！」

そしてコナン達は青藤ホテルに向かつた。

哀「……」

哀は一足遅れて青藤ホテルに向かつた。

## DAIYAMONDust（後書き）

最初の方はいらないでショットと思つた方もいられるでしょうが、一応最後の最後に繋がります。

ちなみに、弟子屈町は実際にあります、青藤ホテルは実際にありません。信じないで下さい（笑）

## 10. 永山 永美 (前書き)

10. 永山 永美 (憧れ)

### \* 読み方注意

『須山 永恵美』は『すやま ひえみ』と読みます。

『浩樹』は『ひろき』と読みます。

どちらも人の名前です。

（青藤ホテル）

フロント係り「部屋は205と206号室になります。」

蘭「ありがとうございます。」

小五郎「あの…ここに『須山水恵美』って方いますか？その方に呼ばれて来たんですけど」

フロント係り「さあ、そのような方はいらっしゃいませんけど…」

小五郎「え？ おつかしーな。まだ来てないのか」 ノナン「

……」

ノナン達はそれぞれ自分の部屋に向かった。つとまつても部屋は隣同士なのだが…

『205号室』がノナンと元太と光彦と小五郎と博士。

『206号室』が蘭と園子と歩美と哀。

（206室）

園子「うわー！和式ね！窓からは雪原が見えるし、最高ね」

蘭「ホント、落ち着つくね。」

部屋は和式で広く、窓からは森林の新鮮で冷たい風が吹き込んでくる。

また、窓からは白くて広大な雪原が見える。

小五郎「つたく、依頼した本人がまだ来てないとは…呆れたもんだぜ。」

小五郎は部屋に入るなり、愚痴をこぼした。

コナン「ねえ、電話で依頼を受けたの？」

小五郎「いや、手紙だぞ。ほら、これだ。」

小五郎はコナンに手紙を出した。

『拝啓 毛利小五郎様

冷たい風が吹き付ける季節となりました。皆さんお元気でお過ごしでしょうか。さて、今回私があなたに手紙を差し出したのは他でもありません。依頼したいことがあるからです。

事故以来、姿を消してしまった弟の「浩樹」の行方を探してもらいたいんです。現在は7歳の男の子で、左目の人下にほくろのある子なんです。では、北海道弟子屈町の青藤ホテルでお待ちしています。

敬具

須山氷恵美

ナン（手書きじゃなくてワープロで打ったのか…なーんて、そんなこと考えたつて無駄だな）

コナンは手紙を放り投げた。

コナン「依頼者はまだ来てないみたいだけど、その浩樹って子、探

そう。」

小五郎「あ、ああ…」

「ついでコナン達はみんなで浩樹君を探すことにになった。

～ある雪原～

コナンと博士は山を搜索した。

少年探偵団と哀と

“午後4時頃”

博士「あれから3時間探したが、なかなか見つからんのー。その浩樹君といつ子。」

コナン「やつぱりそう簡単に見つけられねーよな。」

元太「もう俺ヘトヘトだぜ…あ～早くホテル戻つてうな重食いたいぜ！」

みんなはヘトヘトで、歩くスピードが遙かに遅くなっていた。まるでお化けのようだった。

「ナン（大分ホテルから離れた気がする）

コナンは手にしている地図を見ながら思つた。

歩美「もう帰るわ」

「アーティストの心」

疲れ果ててフラフラしている歩美はもときた道に振り返った。でも  
その瞬間…

歩美「ややあああー！」

ノルマニヤの形態論 - 111 -

でも「ナンが落ちそうになつた歩美の腕を掴み……代わりに自分が  
犠牲になつた。

「ナン」「つわあー！」

滑り落していく。

歩美「コ、コナンくん！……！」

歩美は叫んでコナンに手を伸ばした。

間に合わなかつた。コナンはそのまま崖をずり落ちていつた。

結果、コナンは足を捻挫してしまった。

一同「コナン(くわん)ー」

コナン「痛つー。」

光彦「大丈夫ですかー？」

みんなは崖の上から心配そうに顔を覗かせる。

コナン「オイオイ、そんなに叫ぶなよ…つたく大袈裟なんだよ…  
つー。」

コナンはやうにまだ痛む足で、木の根つ子や石を這つて上まで登つた。

そのコナンに歩美は近寄り、何度も謝つた。

歩美「『めんね』コナン君ーー本当に『めんね』ーー。」

歩美は少し涙目、涙声になつて必死に謝つた。

「ナン」「このへり、大丈夫でよくなき撃挫はするし。歩美ちゃんは何も悪くないから泣くな。それに歩美ちゃんが無事で良かつたぜ。」

「…」

「ナンは足の痛みを隠しながら、責任を感じている歩美を笑顔で励ます。

歩美「ナン君……」

歩美は「ナンの優しさを全身で感じた。

やつぱつ「ナン君は私の…………憧れ…………」

哀「……」

一方哀は何かを思い出したかのような顔で、その光景を見つめていた。

「ナン」「どうした、灰原」  
哀「いえ……何にもないわ……」  
哀は少し驚いたが、表情を元にもどして首を振った。  
博士「とり

あえずホテルに戻る。」

テルに戻った。

そして博士（達）は、コナンをおぶつてホ

いきなりの展開ですが、許してください（――）  
この出来事によつていた歩美ちゃんが変わつてこります。

## 2. in HOTEL (宿泊)

題名ベタドリめんなさい（――）

ちゅうとつめんないです。

（青藤ホテル）

（205号室）

「ナン」「あれ？おじさん。もう帰ってたんだ！」

部屋の中には小五郎がタバコを吸つて座っていた。

小五郎「なんか収穫でもあつたか？」

博士「いや……そつちはどうじやつたんじや？」

小五郎「全然……ん？」「ナン、足どうしたんだ？」

歩美「へへへ」ある「ナン」に尋ねる。

「ナン」「ちよつと転んで捻挫しちやつて……えへへ……」

小五郎「つたぐ、気を付けろよー！」

その時、ドアをノックする音がした。

入ってきたのは、蘭、園子、歩美、哀だつた。

蘭「哀ちゃんから聞いたわ。石につまづいて捻挫したんですね。」

コナン君、足大丈夫？」　コナン「うん。平気だよ。」

歩美「……」

哀は石につまづいて転んだと蘭達に言つていたが、本当は自分（歩美）の代わりに捻挫した。まだ責任を感じているのか、少し気まず

そうにする歩美。でもそんな歩美にコナンは優しく微笑む。

光彦「あ、そうだ！みんな露天風呂に入りませんか？疲れてるだろうし。」

元太「入るうぜ！入るうぜ！」

園子「そうね。眼鏡のガキンチョも露天風呂入れば足の痛みが癒やされるかもしれないし。」

園子はコナンを見ながらニヤニヤして言ひ。

蘭「じゃあみんなで入りましょ。」

こうして露天風呂に入ることになった。みんなはそれぞれ入る準備をした。そして……

～女子露天風呂～

歩美「気持ちいいね～」哀「ええ。」

歩美「ねえ、哀ちゃん……」

哀「何？」

歩美は恥ずかしそうに言ひ。

歩美「哀ちゃんは……憧れの人って……いる？」

哀「…………いいえ、いないわ」

哀は少しためらうたが、いないと答えた。  
口ではそう言つてゐるけど……それは嘘だ……

だつて私の憧れは……お姉ちゃんなんだもの……

哀「吉田さんは？」

歩美「私の憧れの人はね、コナン君。」

蘭「へえ～歩美ちゃんの憧れの人ってコナン君なんだ。」

園子「眼鏡のガキンチョも案外尊敬されるのね。」

歩美「コナン君、頭いいし、勇氣あるし、優しいし。」

哀「……そうね。」

歩美「蘭お姉さんの憧れの人は？」

突然歩美が尋ねる。

突然聞かれたので蘭は慌てた。

顔赤いわよ……

哀は心の中でつっこんだ。

蘭「わ、私

は……」園子「新一」

園子は蘭になりきつて答えた。

蘭「ち、違つわよ！」

園子「じやあ誰？」

蘭「そ、それは……」

園子は嫌み口調で蘭に問い合わせる。

その質問に蘭は答えることができず……さらに顔が赤くなる。

園子「新一君でしょ？」

蘭「そうじやないけど、そうかもしない……」園子「やっぱり新一君なんでしょ？全く、蘭は素直じやないねえ。」

そんなこと、彼女の顔見ればわかるじゃない。顔に新一って書いてあるし。

哀はまた心の中でつっこんだ。

蘭「新一は優しいし……誰かを守ろうとしたら自分がどうなつても必ず守ってくれる。それに……例え殺人犯でも絶対に傷つけない……」

下を向きながらそう語る蘭の顔はまるで恋人を見つめているかのようだった。

誰だつて憧れの人はいるのね。冷酷で無慈悲なこの私でさえいるんだもの……人は目標や目的がないと、大人にはなれない……もし憧れの人を失つても、その人が憧れの人である限り変わりはない……私のようにね……

哀（なーんて……くさい）と考えるのは止めにしよ

哀は露天風呂の湯をすくつてはゆっくりと垂らしそれをじーっと見つめた。

「男子露天風呂」

光彦「コナン君、足少しはましになりましたか？」

「コナン」「ああ……」

元太「なあ、今日の午後8時半からこのホテルの近くの川湯温泉街で『ダイヤモンドダスト in KAWA YU』ていうイベントあんの知つてつか」博士「川湯温泉街でやるあれか。確か湯の川園地の森でイルミネーションで飾られた散策路をスノーシューで歩きながらダイヤモンドダストを探すイベントじやつたな。」

光彦「へえ～。楽しそうですね。あ、このホテルの近くならそのイベントに参加しませんか？」

元太「そうそう。俺もそう言いたかったの」

小五郎「そんなイベントに参加する暇なんてねーよー。だいいち俺達は浩樹君を探すために……」

博士「まあまあ、もう夜じやし、人探しはできんよ。それにせつかく北海道に来たんじや。少しほは楽しんだりどうじや？」

小五郎は何も言えなくなつた。

元太「つてことで…決つまり～！」

「コナン」「ハハハ……」

そして午後7時前だといつのこと、夕食を済ましたコナン達はみんなで川湯温泉街に向かった。

## in HOTEL (後書き)

『ダイヤモンドダスト in KAWAYU』は本当にあるイベントです。一応内容も同じです。ちなみに川湯温泉街は本当にあります。

ダイヤモンドダストは夜でも気温が低ければ見れるそうです。キラキラ光らないと思いますが…

詳しく述べは携帯やパソコンで『ダイヤモンドダスト in KAWA YU』で検索して調べて下さい。

## memory - HBEZO (記憶)

memory - HBEZO (記憶) (用に出てるページ)

短いです。

# 川湯温泉街 湯の川園地

歩美「うわ～、綺麗！」

一回・ホント……」

イルミネーションの優しい明りと温泉川から立ちのぼる湯煙のコントラストは、凍てつく冬の夜空を情緒豊かに照らしていた。

小五郎「おー!!」れば絶景だなー!!  
博士「見事じやー」「ー」

園子：イルミネーション、絶妙にmatchして何とも言えないわね～

みんなは眼前の景色に心を揺りされた……

瞳めの前にあるのは、まるで幻想の世界……

# イルミネーションの光、温泉川の湯煙

## 夜の冬景色

その上を舞い踊る子供達…  
それは冬ならではの景色……

冬の全てが、心を揺らす……

元太「すげー！すげーすげー！！すっげー！！！」

光彦「げ、元太君…さつきから『すげー…』しか言つてませんよ。」

元太「いーしゃねーか！本当にすげーんだからよ…！」

コナン「まさにすげーとしか言いようがねーな！」

コナンは前に広がる景色に瞳を輝かせながら元太達の方へ歩いていった。

元太は光彦をジト目で睨んでにやけた。

光彦「……アハハハ…ホントすげーとしか言いようがないですね~」

…

みんなは小さく苦笑した。

哀（確かに姉ちゃん達と一緒に北海道に来た時…一人でこのイベントに参加したんだっけ…）

蘭「……」

蘭はまるでアルバムを見ているような田で景色を見まわした。

園子「ああ～！こんな素晴らしい景色を、愛しの愛しの新一に見せたかつたな～～！な～んてね～」

そんな蘭を園子はからかう。我に帰った蘭は顔を赤らめて言つた。

蘭「な～？ち、違うわよ～！…ただ…」

園子「…ただ？」

『ただ…』その言葉に疑問を抱く。みんなは蘭に注目した。

蘭「懐かしいな～って…」

一同「え？」

懐かしい？

蘭「私がまだ小さかつた時ね、新一の両親が仕事の都合で北海道に

行くことになったの。新一はいくつていつてたから、私も連れていつてもらつたの。」

「ナン（やーいやそんなこともあつたっけ…ハハ…すっかり忘れてたぜ……）

蘭「北海道に着いてからは、いろんな観光地をめぐつて…その時、ダイヤモンドダストを見たの。」

園子「なるほど、今日の昼、蘭がダイヤモンドダストを見て『懐かしいな～』つて言つたのはそんなことがあつたからなんだ。」

蘭「うん。それで夜みんなでこのイベントに参加したんだ。」

蘭が一通り話しあがると、園子はまた蘭をからかう。

園子「なんかロマンチックね。あんたらがそんな昔から變しあつていたなんて、私知らなかつたわ～～」

「ナン（なーー？）

蘭と「ナンは赤くなつた。

蘭「そんなんじゃないわよー。」

歩美「でも昔からの恋つて素敵よね～ー。」

「ナン」「歩美ちゃん！」

光彦「あれ？ ナン君、顔赤いですよ。」

光彦は不思議そうに尋ねた。

小五郎「なーんでお前が赤くなるんだ？」  
「ナン」「あ、いや…………」

哀「ホント江戸川君、顔真っ赤つか。」

哀は小さく笑いながら小さな声で言った。

「ナン」「は、灰原！」

哀「顔が真っ赤で熊さんみたいね。可愛いわよ。クスッ」

哀は冗談半分で言つ。

そして博士も嫌みっぽく笑つた。

しばらくの間「」などとが続いた。

} } } } } } } }

を切つた。

そういう内にイベント開始まで10分

## memories IBENZO (後書き)

話しが全然進展しなくて「めんなさい」――

蘭の過去、哀の過去は後ほど詳しく教えます。

## past tragedy(前書き)

past tragedy(過去の悲劇)

題名が本当にこれであつているか分かりませんが許して下さい。

### \* 読み方注意

『六戸明子』は『しじぞあわい』  
『増永久美』は『ますながくみ』  
『菅野義治』は『すがのよしはる』

『大沼忠史』は『おおぬまだし』  
と読みます。全部人の名前です。

“あれから10分後の午後8時30分”

ダイヤモンドダスト in KAWAYU は開催された。

会場は参加する子供の声で賑わう。

最初に挨拶と説明があつた。

このイベントは、川湯温泉街の湯の川園地の森で行われ、イルミネーションで飾られた散策路を、スノーシューで歩きながらダイヤモンドダストを探すイベント。参加できる子供の数は少ないが、コナン達はギリギリ参加できた。

そして…ゲーム始め。

元太「よし。行こうぜ！」

光彦「はい！」

歩美「コナンと哀ちゃんも」

」

コナン「あ…おう。

歩美はコナンと哀の手を引つ張り、元太と光彦と一緒に走つて行つた。

そんな少年探偵団を、蘭達は暖かく見ていた。

明子「可愛いお子さんね」「ふと後ろで声がした。

蘭「え？」

後ろにいたのは4人の大人だった。

明子「あ、いきなり『めんなさい』知り合いの子を思い出して…私は穴戸明子といいます。」

久美「私は増永久美です。」

菅野「俺、菅野義治！」

大沼「俺は大沼忠史」

明子「久美は去年私達の大学へ転入した同級生で、あと3人は幼なじみで、大学3年生なの。みんな北海道に住んでて、よくこのイベントに参加したのよ。」

蘭「へえ……あ、私毛利蘭です。こちらが親友の鈴木園子で、その後ろが阿笠博士で、私の横が父の毛利小五郎です。」

久美「毛利小五郎つてあの有名な…」

大沼「小五郎さんがいるつてことは、北海道で何かあつたんですか？」

小五郎「あ、いえ…ちょっと人探しの依頼を…」

明子「人探し…か…じゃあ私達も…」

元太「え〜！？」

遠くで元太が叫んだ。

小五郎「どうしたんだ？」

元太の声を聞いて驚いた蘭達は、少年探偵団のいる場所へ走って言った。

蘭「どうかしたの？」

向こうから蘭達が走って來た。

そこには、見知らない一人の少年がびくつきながらベンチの上に座っていた。

その光景にあの大学4人組みは驚いた。

明子「浩樹君……」んなところにいたのね……」

一同「え！！」

小五郎「じゃあまたが、」この子が浩樹君ーー？」

「ナン」「うそ。」

“2分前”

元太「はあ…なかなか見つかんねえなー、ダイヤモンドダストーー」  
光彦「はい……」歩美「ん?どうしたんだろ?、あの子。寂しそうな顔してるよ。」

歩美はベンチの上に座っている一人の男の子を差した。

「ナン(左田の下にほぐら?、またか…)

歩美「ちょっと話しかけてみよつよー。」

光彦「そうですね。」

歩美達は恐る恐る男子に近づいた。

歩美は男の子の肩を叩き、挨拶をした… そのとれ…

歩美「どうしたの?、気分悪いの?、お母さんやお父さん…」

ビクッ

「ほ、僕に触らないで…！」

その男の子は歩美の手を追い払い、大声で叫んだ。

哀「…どうかしたのかしら。」

「ナン」君、もしかして浩樹君?「え?」

「え?」

元太「え~!?」

光彦「浩樹君つて、あの依頼文に書いてあ

つた浩樹君ですか?」

歩美「うそ~!~」

「.....」

コナン「ねえ、お姉さん達はこの子のこと知ってるの?」

「ナンは明子達に尋ねた。

明子「ええ?」

小五郎「ちょっと話を聞かせてもらえないませんか?」

明子達「はい?」

小五郎「では青藤ホテルで...よろしいでしょ?」

菅野「いいですよ。俺達もけっこうそのホテルを借りてるし...」

小五郎「じゃあ行きましょう。」

イベント中だったが、コナン達は一度ホテルに戻つて、あの4人から詳しく話してもらつことになつた。勿論、浩樹も一緒に

青藤ホテルへ向かつたコナン達はロビーの椅子に座つて話を聞いた。

小五郎「では早速話を聞かせて下さい。」4人は互いに顔を見合つたが、明子が口を開いた。

明子「浩樹君は私達の親友の弟だつたんです。でも一年前、浩樹君はお姉さんと雪崩にあいました。結果、お姉さんは見つからず、浩樹君は見つかつたんです。浩樹君は運ばれた病院から姿を消していました。お姉さんは今年、危難失踪を認められ、正式に死亡したことになつたんです。」

園子「危難失踪？」

園子は明子に聞いたが

コナン「普通失踪と危難失踪があつて、普通失踪は7年で死亡が認められるんだけど、今回の話みたいに災害や遭難のように明らかに死亡した思われる危難失踪は、一年で死亡が認められるんだ。」

蘭達「へえ……」

園子「……て！あんたに聞いてないわよ！……」明子「あつでもその坊やの言つとおりですよ。凄いわね。」

小五郎「おほん！まあそれはおいといて、本題に戻りましょう。」

明子「はい……浩樹君がいなくなつた夜から私達は浩樹君を必死にさがしました。でも見つからないまま、現在に至つたんです。まさか浩樹君が見つかるとは思つていませんでした。私からはこのくらいで……」

菅野「俺からも特にないが……」

大沼「俺も……」 久美「私はこの4人とは去年知り合つたばかりなので浩樹君や浩樹君のお姉さんのことは……」

小五郎「さつきから気になつてたんますが、浩樹君のお姉さんの名前は……」

明子「名前は『須山氷恵美』」

小五郎「どつかで聞いた名前だな……確か手紙の……」  
コナン達「……！」

小五郎「つておいおい……そんな馬鹿な！？だつてこの人は……」

## past tense (後書き)

オリキヤ「今」、しかも「前」が表で「」めんなや」  
m (—) m

s u d d e n l y (前書き)

s u d d e n l y (突然)

久しぶりの更新です。

遅くなつてごめんなさいm(ーー)m

今日は短めかな?

会話だけです(いつもだけど)

明子「名前は『須山氷恵美』」

小五郎「どうかで聞いた名前だな……確かに手紙の……」  
コナン達「……！」

小五郎「つておいおい……そんな馬鹿な！？ だつてこの人は……俺に依頼をしてきた人だぞ！？」

小五郎は素つ頓狂な声を張り上げて驚いた。大学生達も驚いきの表情を表していた。

哀「今頃気付くなんて……全くね……」

コナン（俺も今まで気付かなかつた……）

みんなが驚いているときだつた……大沼の様子が可笑しくなつた……

大沼「ひ、氷恵美……やっぱり生きてたんだ……」

大沼はまるで誰かに取り付かれたように小五郎の方へ歩みよる。

大沼「氷恵美！」

小五郎「つちよー！」

突然大沼が小五郎に襲い掛かろうとした。

久美「大沼君！失礼よ！」

久美の声で大沼は我に帰った。しばらくの間沈黙が続いた。

小五郎「あの……大沼さんどうかされたなんですか」

明子「え？あ、ああ……実は大沼君と氷恵美、付き合っていたのよ……」

小五郎「そうだったんですねか……」

菅野「……大沼……」

大沼は俯いて手を握りしめた。

明子「それで毛利さん。氷恵美は生きてるんでしょうか？」

小五郎「ええ、多分。手紙には『青藤ホテルで待っています』て書いてありましたので、ここにこられるかと……」

コナン「でもさあ、本当に生きてるのかな？氷恵美さん」

コナンは小五郎の意見に反するように言つた。

コナン「だつてさ、依頼した本人が先に目的地にいないのつて變じやない？」

小五郎「……」

コナンはそれに続け……

「ナン、それに、この手紙、ワープロで書いてるでしょ？ これじゃまるで自分の正体を隠してゐる…」

「ナニの言葉を遮るよりに小五郎は言つた。

小五郎「ぶあゝか！ワープロで手紙を書く人くらいいるじゃねーか！それに依頼者にだつて都合があるつてーの！だから何も可笑しくねーんだよ！」

「ナン」……だから僕が言いたいのは  
蘭「ナン君、お父さんの言つ通りよ。で、後はお父さん達に任せ  
て寝ましょ。」「

「ナノ（ハル）ー誰も相手にしてくれねー（

「ナンせ細かに歯を食こづせりた。

哀（…工藤君…）

蘭「まうロナシ君!!」

「ナン、だつたらさ、明日どこかに遊びに行こよー。浩樹君連れて」

いきなりのコナンにみんなは驚いた。

小五郎「いい加減にしろ！俺たちは遊びに来たんじゃないんだぜ！それにその間に依頼者がきたらどーすんだ！」  
コナン「明子さん達に頼めばいいじゃない。」

小五郎「てめえ～」

コナン「行きたい！行きたい！！僕遊びに行きたい！」

コナンお得意のぶりっこ作戦。

コナン「ねえ、いいでしょお姉さん」

明子「いいわよ。別に」明子は少し微笑みながら言った。

小五郎「あ、でも…」

明子「いいんですよ。明日は特に計画はありませんから。それに毛利さんもせっかく北海道にきたんですから疲れを癒やして下さい。氷恵美が来たときは連絡しますんで」

小五郎「す、すいません。コナン！ちやんとお礼言えよー。」

コナン「はあーい。ありがとー、お姉さん達」

コナンはこりこり笑つて例を言つと表情を変えた。

コナン（よじー）

哀「フフフ…」

コナン「なんだよ…」

哀「別に…」

コナン「…」

この後コナン達は部屋に戻つて就寝の準備をした。



## sudden(後書き)

今回??だけでしたね。読みにくかったと思しますが許して下さい。

次回の更新も遅くなるかも…

trap(前書き)

trap(策略)

更新遅くなっていますみません（――）

題名が思いつかなくて凄くシンプルになってしまいました（汗）

（205話）

部屋に戻ったコナン達。浩樹君から詳しいことを聞こうとしたが、何一つ覚えていなかつた。どうやら雪崩にあつたショックで記憶喪失になつたらしい。

“就寝時”

光彦「コナン君へさつきは何なんですか？いきなり遊びに行きた  
いつて。」

みんなが寝静まつたこりだつた。何故か起きている光彦がコナンに  
尋ねた。

「ナン」「ん？あ、ああ…あれば犯人をあぶり出すためだよ。氷恵美  
さんのふりをして浩樹君の命を狙つてるやつをな」

光彦「は、犯人って…ちょっと待つて下さー。なんでそんなことが  
いえるんですか？」

光彦は驚いてコナンに聞いた。ため息をついたコナンはその質問に  
冷静に答えた。

「ナン」「折り正しい時候の挨拶まで丁寧に書くやつが約束の時間  
を破るなんて思えないし、弟のことが心配なら約束の時間に来て、  
なるべく早く見つけてもらおうとするだり…?  
でも実際そうじゃない。」

それは手紙を送った人は浩樹君のお姉さんの氷恵美さんじゃなく、そのふりをしている誰かってことだよ。」

光彦「で、でも、それはコナン君の想に込みでしょ？」

コナン「ああ、まあ……」

怒り氣味な光彦に、コナンは少し戸惑つた。

光彦の怒りは何故かエスカレートしていく。

光彦「勝手に決めつけるのは良くないと感じます。だいたいコナン君はいつも」

コナン「バーコ。俺は探偵だぜ？ 何かにおつさだよ、このヤツ。」

光彦「ほ、僕だって探偵ですよ。なめかいでください。」

コナン「悪いな、光彦。俺とオマーでは分けが違うんだ。」

光彦「な！？」

コナンの言葉にピキッ ときた光彦は言い返そうとしたが、その前に「ナンが口を開いた。

コナン「確かに光彦の言つ通りかもしれない。でも可能性は無いとはいえないだろ？ 探偵は最悪の事態を考えなきゃいけねーだよ。」

コナンの言葉に俯く光彦。それまでの怒りはじりじりしたのか、落ち着いて言つた。

光彦「それは……そう……ですよね……」めんなさい。それよりコナン君。どうして浩樹君連れて遊びに行こうなんて言つたんですか？外に連れていくのはあまりにも危険なんじや……」

コナン「まだ犯人が誰かなんて分かつてないし、証拠もねえ。浩樹君を外に出して犯人をギリギリまでおどらせて、後で追い詰めるんだ。」

光彦「つまり……」

コナン「一か八かの勝負つて分けや。」

光彦「……」

少しの沈黙が流れた。

コナン（いや、俺の推測はかなり高い確率であたつてるんだ。浩樹君が何故病院から逃げだのか、何故あんなに人を怖がっていたのか。それは多分、雪崩は故意的に起こされたもので浩樹君は犯人をみてしまったからだ。それから記憶喪失になつたものの、無意識のうちに人をさけるようになつたんだ。つまり浩樹君は口封じのために狙われている可能性が高いんだ！）

“ 2月6日日曜日朝 ”

小五郎「（めんなさい、うちのコナンの我が儘に付き合つてもうらつ

て…」

明子「いいんですよ。ああ、ゆっくり楽しんできてください。」

小五郎「では

浩樹君を含めたコナン達一同は明子たちに礼を言つて、青藤ホテルを出て行つた。

行き先は知床半島。

コナンは浩樹君から一度たりとも田舎を離さなかつた。

## trap(後書き)

『一か八かの勝負』

コナン君に言わせたかつた(笑)

監督が佐藤監督の頃のアニメで、『完全半分犯罪』って話があるんですが、その犯人が『一か八かの賭け』って言ってたんですよ。その犯人はキャラ的に好きで、『一か八かの勝負』ってコナンが言つたらもつと格好いいんだろうなって思つたんです。だから使ってみました。

次回は蘭と新一の過去について触れたいです。

更新遅くなると思いますが、よろしくお願いします(ーー)m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7948s/>

---

WHITE狂想曲 ~like you...~

2011年10月8日20時12分発行